

パチャママの在り方

岡本年正 (慶應義塾大学)

キー・ワード： パチャママ、互酬制、畏敬、個別性、普遍性

Un análisis de la existencia de la *Pachamama*

TOSHIMASA OKAMOTO (Keio University)

Keywords: *Pachamama, Reciprocidad, Reverencia, Particularidad, Universalidad*

近年、アンデスの地域的信仰の対象であるパチャママ (*Pachamama*) が、より広範な文脈で言及されてきている。例えば、日本 (語) においても、パチャママに言及するウェブサイトやコラムなどが散見され、ラテンアメリカにおいては、憲法や法律においても、パチャママは言及されてきている。このように、地理的な広がりや、民間信仰の枠組みを超えた広がりの中で注目されているパチャママであるが、もちろん、アンデスの地域的な信仰において変わらず重要な存在であり続けている。本報告においては、近年のパチャママについての言及をまとめ、報告者のフィールドでの「経験」と関連させつつ、歴史的視点、民族学的視点、社会・政治的視点からパチャママの現状を分析し、現代世界におけるパチャママの在り方を考察することを目的とする。

パチャママとは何か。概して、女性性を持つ大地の神格であり、アンデス世界で最も重要な神格のひとつである。母なる大地 (*La Madre Tierra*) や聖なる大地 (*La Santa Tierra*) といった表現が同義、もしくはそれらの表現がパチャママとともに用いられたりする。基本的には、エクアドル、ペルー、ボリビア、チリ、コロンビア、アルゼンチン北部といった汎アンデス的に広がる信仰であり、インカ帝国の版図との重なりを指摘することができる。またパチャママの語義に関して分析している先行研究においてまとめられているのは、パチャママが大地のみを表すだけでなく、時間や秩序といった意味を含み、生命を支えるために必要な自然的、物質的、象徴的な力の全てを携えているとする [Vitry 2003:232]。

一方、アンデスの人々には、絶対的な超越的存在というより、腹を空かせる不完全な存在とし

て認識されている。特に乾期の終わりである8月、大地への支払いと訳せるパゴ・ア・ラ・ティエラ (*Pago a la tierra*) の儀礼において、供物が食事としてパチャママに捧げられる。これを通し、人々は大地、すなわちパチャママに感謝を示しつつ、次の収穫や家畜の増殖などを確実なものとする祈りを捧げる。このパゴ儀礼を巡っては、アンデスの信仰における呪術師であるクランデーロまたはパコ (*Paco*) が、儀礼を行う際に手間賃を受け取ったり、呪物店が供物のパッケージであるデスパチョを販売したり、観光業者がパゴ儀礼を組み込んだツアーを販売するなど、経済活動が行われている。

一方、例えば絵本において、パチャママは守るべき環境全体として描かれ、その環境を守るために祖先の教えを尊重することが説かれる [Pukllasunchis 2008]。他方、エクアドル憲法やボリビアの法律では、環境保護につながる考えであるが、パチャママもしくは母なる大地を主体として扱い、その権利を認めている。

このような現状にあるパチャママであるが、歴史的には、インカ時代以前からの伝統であり、インカによって国家的崇拜対象となった。そしてスペインによる征服後は、聖母マリアとその女性性とシンクロする一方で、マリア像自体は山を表象する形態をとった [Gentile Lafaille 2012]。そもそもアンデスの信仰において、山の神格 (アプ、アチャチラ等) は男性的特徴を示しているが、マリア (のイメージ) を介してパチャママがジェンダーを超えて山までも含むに至っている。

民族学的状況においては、パゴ儀礼において、大地としてのパチャママに供物を捧げてはいる

が、個別にアプを招待(アプの名を唱える)する。それと同時に、都市部で行われる場合に顕著であるが、自らの住む場所や働く場所、ゆかりのある場所の土地の名前や住所そのものを唱え、大地はより個別的な存在として扱われる側面がある。また、大地と人々の互酬の意味だけが普遍的に捉えられ、人々は大地から直接収穫物を得るのではなく、パチャママを介して様々な成功を確実なものとしようとする。パゴ儀礼に関わる観光では、パチャママは普遍的な大地全体の存在として示され、観光客にパチャママを崇拝する余地が与えられ、教育においては絵本の中で自然環境全体へと昇華させられ、環境保護という普遍的な価値へと結び付けられている。絵本では同時に、祖先の教えや伝統・慣習への敬意・継承といったアンデスの文脈における個別性も重要視されている。

そして昨今具体的に描かれるパチャママが、かつての老婆のイメージから、若い女性となっている。これは豊穡、そこからの成功との結びつきの一方で、老婆、つまり年配者への畏敬、特に「畏れ」が抜け落ちているためと考えられる。近年のパゴ儀礼に見られる姿勢には、与えれば生み出すという循環のみが考えられており、なぜパチャママが「食べ物」を欲しがるのか、それを行わない場合は何が起こるかといった「畏れ」については考えられていない。そして都市部では、各人の経済状況や必要性によって恣意的にパゴ儀礼が行われ、パチャママは都合よく利用される対象となっている。

社会・政治的側面として、法律上パチャママの権利を認めることは、大地から自然全体への敬意を共有して自然保護へと向かいつつ、そこに付随する先住民文化を尊重し保護することといえる。特にパチャママを主体として扱うことで、多様な世界を受容していることを示している。とはいえ国家が先住民の世界観を取り込むことは、先住民にとって権利回復・確保・維持につながると同時に、先住民の思想までもが政府の管理下におかれる。政府にとっても先住民にとっても、パチャママが政治的利用の対象となっている。

このように、個別的かつ普遍的であるという二面性のおかげで、パチャママは個別具体的な意味を維持しつつも広範に受け入れられており、その結果、パチャママへの信仰が活性化している。一方で、普遍的に受容される中で、人々に与えるだけでなく供物が無ければ奪うというパチャママ本来の二面性のうち、奪うという畏れの側面が抜け落ちてしまっている。個別性がなく畏れられないパチャママは、アンデスの信仰における本来の意味でのパチャママ像と異なる。ここにおいて、アンデスの信仰は現代世界において利用できる側面のみが受容され、アンデスの人々にとっての本来の意味が薄れてしまっていることが指摘できる。都合の良い普遍性のみを受容することは、現代世界がアンデスの民間信仰、そして文化を吸収・統合する方向へ進み、現代世界が目指す文化的固有性を認め多様性を維持し続けることから逆方向へ進むこととなる。以上より、世界の多様性を考えるうえで、パチャママは重要な考察対象の一つとなる。いかにパチャママが受容/利用されていくかを引き続き注視していくことは重要である。

【主要参考文献】

- Gentile Lafaille, Margarita E., 2012, Pachamama y la coronación de la Virgen-Cerro. *Iconología, siglos XVI a XX. Simposium (XXª Edición):1141-1164.*
- Pukllasunchis, 2008, *Apu*. Asociación Pukllasunchis, Cusco.
- Vitry, Christian, 2003, Fiesta nacional de la Pachamama: El ritual de alimentar a la tierra. In *Gastronomía y turismo: Cultura al plato*, edited by Lacanau, Gloria C., and Juana A. Norrild, pp.227-244, Centro de Investigaciones y Estudios Turísticos, Buenos Aires.